



▲行儀良く先生や来賓の方のお話を聞く子ども達

### 3 入所・進級をみんなで祝い 保育所で入所式

町内の3保育所では4月5日に入所式が行われました。明和保育所では新たに9名のおともだちが入所し児童数は39名となりました。入所児童の紹介では担任の先生から名前を呼ばれるとみんな大きな声で元気よく返事をしていました。式の後には保育所職員がご飯のおかずをテーマにした寸劇を披露し親子で楽しみました。

今年度の児童数は只見保育所で34名、朝日保育所で28名となっております。

## 第13回 春待ち チャリティー演芸会

4月13日に季の郷湯ら里で、只見の春の恒例行事となっています春待ちチャリティー演芸会が行われました。演芸会の冒頭、社会福祉事業へ役立てて欲しいと出演者や来場者から寄せられた寄附金119,973円が目黒町長へ手渡されました。

演芸会には町内からの参加者だけでなく、近隣町村からも大勢参加され総勢60名、30の舞や踊りが披露されました。



1



2

1 会場はたくさんの観客で埋まり、次々に披露される華麗な舞に惜しみない拍手が送られました

2 目黒町長へ寄附金を手渡す演芸会事務局の赤塚ミワさん



▲ちょボラ参加者の印、オレンジ色のベストを着ての記念撮影

## 朝 自分達の町は自分達できれいに 日地区 ちょボラごみ拾い

4月20日、朝日振興センター・運営委員会などが主催したちょボラごみ拾いには約70名の方が参加され朝日地区の国道や県道沿いのごみ拾いを行いました。黒谷入地区などでは自主的に地区内の清掃作業を行われ、今回のちょボラごみ拾いで集めたごみの量は燃えるごみ袋で35袋、燃えないごみ袋で17袋となりました。

只見の美しい景観を損なわないようごみのポイ捨てはやめましょう。

## ブナセンター講座 「八十里越の歴史」



3月23日(日)、飯塚 恒夫氏(只見町文化財調査委員)を講師としてお招きし、ブナセンター講座「八十里越の歴史」を開催しました。

飯塚氏はあいさつの中で、新聞に掲載された八十里越古道の起点である只見と若松をつないだ銀山街道の記事について触れられ、今回「八十里越」の話をするにあたり、「今の人がどれだけ古道について関心を持っているのかと思ったが、この記事でかつての街道を活用しようと古道について関心を持ち活動する人がいることがわかった」と話されました。

今回の講座は、「記録が語る会越の交流」と「八十里越の改修」の大きく分けて二つの内容でした。

会津と新潟を結ぶ八十里越には、叶津口留番所が置かれ、人や物の流通の取り締まりが行われた記録が残されています。記録からは、男子は商人や百姓などが多く、商いの他に収穫のため行き来していることがわかりました。婦女子は、日光へ参詣に行く者が多く、それに添男が1人か2人付くと説明がありました。しかし、相当なお金持ちでなければ日光へ参詣に行くことはなかったそうで、実際は身売りだったのではないかと思います。

物の流通では、主な産物として絹糸や真綿、からむし、ゼンマイなどを売って収入を得ていることがわかり、越後からは、木綿や装身具、鉄製の農具、魚介類(干物)や塩などを購入していた他、関東などからお茶や蚕種子(卵)などを買い付けていたようです。ここで面白いのが、只見地域は幕府の直轄地で若松預かりだったにもかかわらず、その流通のおよそ96%が越後との取引であり、若松城下とは全体の4%ほどの取引しか無かったことです。このことから「只見では三代遡れば越後とのつながりがある」と言うほど強い繋がりがあったということがわかります。

天明三年の大凶作の折には、米が留物とされましたが、こちらからの要請で越後より救援米が届けられました。宝暦五年の凶作では、熊倉の餓死者はほとんどいなかったため、越後から子どもを引き取って育てた記録も残されています。また、子どもがいない家や禿(つぶれ)屋敷が多かったため、只見の過疎対策に越後の人に養子に入ってもらったというお話もありました。

次に、天保14年の大改修(古道)、明治14年の新線開削(中道)、明治27年開削(新道)の3つの道についてお話がありました。

古道は、浅草岳登山道として現在も一部が利用されていますが、傾斜が急だったため、牛や馬が通れる道として天保14年に大改修が行われたそうです。この時、会津と越後側で人件費の分担を決め工事にあたったそうですが、越後側の大白川新田村分は、費用が出せないと訴えがあり、改修地が会津藩預り地であったため幕府直轄事業として会津藩が費用を負担する事となりました。

この改修によって、牛馬の通行が出来るようになりましたが、荷車が通る事が出来るようになったのは、明治27年の開削によってできた新道からだそうです。明治14年の改修でできた中道は、それほど広さが無い上、傾斜も強く用をなさなかったため新道が作られたそうです。

質疑応答では、「古道から新道までで現在通行可能な道があるか」、「資料に出てきた河井新道とは何か?」などの質問があげられました。八十里越の講座と言うことで、町内の方が多くみえられ、地元の歴史について理解を深められたようです。